

地球第十二卷第二號

昭和四年八月一日

東亞地域の概観

小川 琢治

一、緒言

東亞の一角に生息する我々日本人の最先に知らねばならぬ問題は此の環境である。是は單なる地文又は人文地理學的考察に當り重要な根本問題たるに止らずして、社會的には生活の要件であり政治的には國家存立存續の要件である。我々日本人は亞細亞大陸から離れた島嶼に三千年の久しきにわたり比較的に靜穩なる生活を續けたとはいへ、隣接する地域と離れ難い關係の下に發達して來たのである。その過去の關係は我々に取つては主として被働的で、大陸文化の波動が海を越えて傳播したことを認め、最近半世紀間に初めて相互の關係の一變を起し、被働的位置から能働的位置を取り、千年前に洛陽長安の文化中心が波動の起點であつた如く、現今は東京と大阪とが東亞の政治經濟の中心となるに至つた。我が日本國民及び國家の占むる此の優越なる位置は國民の時を得たる自覺に適應する行動により贏ち得たる當然の成績ではあるが、過去に於ける相互の關係に比して物

質的要素の重要を加へ、交通運搬の便を缺いた時代に比して物資の交換即ち通商貿易が迅速にして低廉に行はれる現代の面目は全く異つてゐる。之を換言すれば大陸内部及び邊緣の地域と我が島嶼との間に物資交換の交流作用が行はれ、相互の關係に互惠性 Reciprocity が成立してゐるのである故に能働とか被働とかいふ語の相對的意義を一概に誇張して考へられぬ。

國際間に於ける彼我の位置の最近百年間に顛倒した原因は主として自然科學の進歩に伴ふ交通機關の改良に在つて、就中蒸汽機關の發明以後に海上交通が容易となつたことに在る。世界近世史そのものが航海術の進歩の歴史と歩武を共にし、英國の地理的位置の意義がその以前と以後に於いて全く反對となつたのと同じ一の徑路に由り、日本の場合にも亦た海上交通の便が新らしい世界の大勢に順應する捷徑を成した。

然れども海上の交通による物資の國外からの輸入を仰がぬ自給自足の窮屈なる生活が之と共に一變したから、大陸邊緣地帯の大豆棉花乾燥なる内陸地域の羊毛熱帶地方の砂糖の如きものが日用の缺乏を補ふ必要となり、我々日本人の生息する環境と看做す範圍は海を隔てた東亞の全域に、南方の熱帶島嶼地方(馬來諸島)をも加へねばならぬことゝなつた。

而して此等の地方は地勢地質氣候の對照極めて大なると共に、埋藏する有用礦物、生育する動植物の產物、生息する民族も亦た千差萬別にして、個人の生活と國家の存立とは此等の地理上の要件に適應する方針に従ふ外に百年の長計を求め難い譯である。

故に此の環境を成した土地と之を占有し之を利用する住民とに關する討究が我々の根本問題とな

つて来る。左に先づ東亞地域を概観して箇々の地方に論及する第一歩とする。

二、禹貢九州

東亞地域は三千餘年の以前の青銅時代から文化の大に榮えたのであるから、その土地に關する智識は古くから纏つた文獻を成し、孔子の學派に屬する儒家は禹貢を堯舜の黄金時代に出來た地理の古書と看做し、逸周書及び周禮の職方を周室の天下統一の當初に周公の定めたものとし、その範圍は何れも今の支那本部の中雲南廣西廣東福建等の南方數省を除いた十八省の約三分二を含む地域にして、是が古代支那文化の波及した限界と看做してよい。リヒトホーフエンの『支那』第一卷に兩篇を先づ紹介したのは此の儒家の傳承を尊重したもので、西洋の東洋學者が東西交通の資料として類書に見えた記載を採つた幼稚なる狀態から未だ十分に解放されぬ時期に於いて敢て怪むに足らぬのである。

リヒトホーフエンの我々を啓發した功績には歐米の踏査に熟練した眼により支那本部の土地に對してその地盤の成立、構造、變動に基いてその現在の地勢地形を記載説明した點が最も著しい。一八六二年に北海道の地質調査に従事した後に揚子江山西蒙古を経て歐洲に向つたラファエル、バンペリーの後に出たといへ、その事物の根柢に徹する觀察と綜括組織する能力の非凡なるとは恐らくはフムボルト以後第一人であるとして過褒であるまい。故に東亞の土地と住民とを論ずるものはリ氏の研究を出發點とするに非ざれば確かな立脚點に立つとはいへない。

然れども東亞文化の曙光を浴びた地域に關するリ氏の研究は我々首肯し得ない所で、先秦文獻は儒家の經典以外にも今日まで傳はつたものがあり、又た經典中に散在するものと雖も別種の見地から取捨選擇すれば、その窮屈なる解釋から離れて材料そのものゝ正當なる價值が發揮されるものが少くない。我々の二十年間に討求した所（支那歴史地理研究初集及び續集參看）によれば、リ氏の劈頭に置いた禹貢九州は次の周禮九州よりも後れて戰國時代の編修に係るものとなる。堯舜禹三聖の出た黄金時代を理想とする儒家の手でデツチ上げた地理的智識の精粹として大に意義あるも、龜ト文字や青銅寶器に東亞最古の文化の華實を留めた殷代より以前の確かな文獻ではなく、リ氏の引き下げて孔子の頃の集成とする儒家傳承よりも遙かに後れて戰國に入り九流百家の學藝が興つた頃に出來上つたと結論される。

戰國の間に世界 *Oekumene* といふ觀念が非常に擴大せられたことは、孟子と略ぼ同時に出了騷衍の大九州説に明かに認められる。その説では中國即ち禹の九州は天下の八十一分一に過ぎない、この赤縣神州の如きもの九あつて、その外に裨海があつて之を環り、その各州は人民禽獸の類が互に交通し得ない一區を成すものと考へ、此の如き大州九つの外に大瀛海があつて之を環るといふのである。此の人は齊宣王の時の學藝の淵藪たる稷下に居た學者であるから、當時齊は即墨邊をエンポリウムとして海上貿易が頗る盛んであつて、その結果恐らくは南海に通じ、印度、印度支那との交通も行はれ、大洋を以つて世界の果てと看做す様になつたのでないかと想はれる。

漢代の中葉司馬遷が史記を作る時には孔子の門下が認めた堯舜の前に黃帝顓頊帝嚳の三帝を加へ

て五帝本紀を第一卷として筆を黃帝に起した。而して當時の國土又は勢力範圍を示すに黃帝の巡狩した四極を以てし、東は海に至り丸山（山東朱虛縣凡山）に登り岱宗に及び、西は空桐に至り雞頭に登り、南は江に至り熊湘に登り、北は葦荊を逐ひ符を釜山に合せて、涿鹿の阿に邑したといふ。此の限界は東は山東まで、西は涇水の分水界まで、南は江水の南岸洞庭湖の邊まで、北は太行山の北端（山西省の北界）までを含む。顓頊には北は幽陵に至り南は交趾に至り西は流沙に至り東は蟠木に至るといひ、その限界は西南共に著しく擴張せられ、堯舜の時にも略ぼ之に等しく、四海の内皆な帝舜の功を戴くといつてゐる。是は漢の戴德の傳へた大戴禮記五帝德篇の傳承に從つた記載で、戰國以後に行はれた五帝といふ五方の神が交代して東亞の世界を支配したとする考へ方に胚胎したものに外ならぬ。

此等は經史に據り認め得る東亞文化地域の先秦に於ける限界であつて、頗る漠然たるのみならず五帝の時代に溯るに至つては禹貢九州よりも更に甚だしい想像説である。此の五帝に關する記載は神話をそのまゝ史實視して之を合理化したものに過ぎないのである。

三、春秋戰國時代の地理的智識の範圍

之に比すれば先秦地理書として山海經の方が遙かに委細を悉くした記載である。その十八卷の初五卷（五臧山經）は南西北東中の五山に就いて、各山脈の首尾の間の著しい山峯の方向と距離を示し各の山から流出する水名を載せ、動植礦物等の名とその形狀効用を明にし、又たその奇怪なるもの

には吉凶の瑞徵をも附加へ、又た屢山の神をも擧げてゐる。而して箇々の山脈の主山には必ず神があつて、その神の形狀と之を祭る時の供物の品目とを記してゐる。即ち五藏山經なるものは三禮やその他の經書に見えた祭典と全く趣を異にした極めて幼稚なる民族的信仰特に靈山崇拜の儀式に必要なる記録であつて、全く儒家の手で合理化する爲めに添削を加へなんだ珍らしい資料である。

此の五卷の内容を觀るに堯舜兩典の四方の名山(四岳)とか周禮職方の九州の名山の如き觀念は未だ明確になつてゐないで、原始的山嶽崇拜の信仰のみに限られ、明かに春秋戰國以後に完成した禮儀の考へ方よりも古く、春秋以後に降つて出來たものとは見えぬ。或は春秋時代以前の記録でなかつたかと思はれる。

五藏山經の山川の名を一々現今の地名に對比することは頗る困難ではあるが、我々の考定し得た若干から推せば南方の限界は廣西廣東と湖南江西との省界を成す五嶺まで達し、東は東海々岸に達し、北は遼西界から黃河北屈部の北岸陰山々脈に達し、西は甘肅省の西端まで延び、唯四川省の西南部から雲南全省、貴州、廣西、廣東、福建の諸省の大部分が判然と知れてゐなかつた。

之を換言すれば洛陽を中心として縱横に引いた直線によつて四象限に區劃すれば、その西南の一象限の大部分は未知の土地 *Terra incognita* であつた。

此の限界線は先秦の地理を論ずるに頗る重要にして、堯典に見えた三苗氏の國が一方では洞庭湖の西南に在るとし、一方では堯が之を甘肅省の西に當る燉煌附近の三危山に流したとする傳説は、此の一象限が未知で漠然と互に隣接する如く想像せられてゐたと考へて初めて理會せられるのであ

る。

前に述べた職方九州の限界も亦た略ぼ此に一致するが、禹貢九州には西南に梁州を配置し、四川省から陝西省の南部湖北省の西部に亙る江水の上流地方を含む巴蜀を一州とするのは此等に比して怪しい。是は戰國の末に秦が蜀を征服した後に此の象限に於ける地理上の智識の範圍が擴張し、禹貢はその頃に至つて初めて編修されたとするのが至當である。

五臧山經の東西の地理書に比して顯著なる特色は地名中に一つも國名又は部落名がないことである。是は歴史地理の資料として利用するには一大缺陷と言ひ得る。

卷六以下八卷は海外四經海内四經より成り、何れも南西北東の順序で記載され、中國九州の外を環ぐる瀛海の外即ち世界の果てを海外とし、異形の人物の居る處とし、四極に四神を配してゐる。海内經の方はその基點を崑崙の墟に置き、九州と瀛海との間即ち中國の邊裔に居る種々の珍異の怪物鬼神の類を羅列してゐる。三首、一手一足、手長、足長、首なしで胸に目あるもの、胸に孔あるもの、羽あるもの、大きな足を持つもの等の異人は如何にも荒唐無稽に見えるが、是は希臘神話に共通なるものがあつて、必しも支那古代だけに限られた説話ではない。

此の海外海内といふ地理的觀念は多分戰國時代の海上交通が開けるに至つて追々に成立しもので騶衍の大九州説はその最後の成形であつたらうと思はれる。

山海經といふ名はこの五卷の山嶽誌と八卷の海外海内民族誌とも呼ぶべきものゝ總稱にして、山川誌 Oro-hydrography の最古文獻である。特に海内東經の末に諸河の源委に關する一篇が附載さ

れてゐて、清畢沅は隋經籍志に水經郭璞注といふのは是であると考へた。兎に角此の部分は支那獨特の水經といふ形式の地理書の嚆矢たることは動かぬ。

日本及び朝鮮に關する最古の記載は海内北經に見え、蓋滅國は鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に屬すといひ、之に續いて朝鮮は列陽の東、海の北、山の南に在り、列陽は燕に屬すといふ。但し是は海内東經の鉅燕は東北陲に在りの次に在るべき文の錯簡であるから東經の方へ移すべきものである。

此の他海内南經には甌、閩、番禺、桂林等の名が見え、當時の限界は大陸の東南邊かけ南邊にかけて支那本部一圓を含み、東北方では遼東半島から朝鮮半島を含み、倭といふ民族のその南に在ることも聞知してゐたのである。

之を要するに先秦時代に洛陽の邊を中心とした東亞文化地域は殆んど支那本部と之に接する東方の諸半島を含み、臘氣ながら日本群島の存在することも知れてゐた。

四、周初の地理的智識の範圍

我々の山海經の研究により確かめ得た範圍は此の如く、之を基礎としてそれよりも古い周初に溯つて考ふるには逸周書王會と穆天子傳との二篇が又た大に役立つのである。前者は成王の時に周公が周人の郷土たる西土即ち渭水流域と殷人の居る東土即ち河濟淮の流域を含む大平野との中間に在る洛陽を土中と看做し、此處に首府雒邑を建設して竣工した時に天下の諸侯を會し、遠方の邊裔民

族も之に參列した盛大な儀式の記載である。我々の興味を牽くのはこの民族名表 V. Ikertafel にも呼ぶべき蕃族とその齎らし來つた珍らしい産物名である。

この中には西北及び北方の甘肅陝西山西の北界から大行山脈の山間に亙り住居する諸族、東北及び東方では肅慎人を初めとし、朝鮮遼東兩半島から山東沿岸の諸族を含み、東南から南方では江南及び甌越の諸族を含んでゐる。日本人が之に參加したかは疑はしく、若し東方に列立した中の兪人即ち倭人であつたとしても、多分山東沿岸にゐた日本人の同族らしく想はれる。

此の頃の周の領土が本部のどれだけの部分を占めたかは明かでない。蓋し周室が同姓及び異姓の諸侯を封建したといふのは土着の酋長なる子男の小國の間に割り込んで方百里の國五十餘國を置いたといふまで、叛亂を起すものあれば武力で之を鎮壓する爲めの軍事的植民地の如き性質のものであつたことは殆んど疑ない。春秋十二列國なるものは此の如き諸侯が次第に周圍の附庸國を併合して領土を擴張した結果として生じ、更にその後には戰國七強國の峙立を見たのである。

此の如き状態であつたとすれば、周初の文化の範圍の甚だ明確を缺くのは當然である。

周初の文獻として貴重なる他の一の資料は西晉太康初年に汲冢(彰德府)から發掘した穆天子傳である。此の書の地名を考究した所ではその西征に當り經過した地方は山西を北進して雁門を越えて包頭に出で、北屈河に沿ひ陰山を越えて抗愛山脈の南麓の泉地に在る西夏國を訪ひ、南下して寧夏の南の黃河峽谷地方にゐる般人一派の國を訪ひ、それから昆侖の丘西王母(西苑)の邦等を訪ふたのである。即ち西土の奥地には王會に列した諸蕃族が部落を成し、燉煌邊までの交通は極めて滑かに

行はれ周初の周人には此の地方の地理上の智識が頗る明確であつたことが明かとなつた。

之に反して南方は渭水流域に興つた周人の勢力中心から遠いだけに容易に屈服せぬ民族がゐた。徐戎淮夷がその中の強大なるもので、成王の時に之を征伐した後、穆王の時には叛いて終に征服されたらしく、穆王の塗山の會といふのはこの征伐の後に行はれたらしく、その場處は淮水南岸の今の鳳陽府附近に當る。是で見れば周の天下統一後百年にして穆王が出で、その勢力範圍が漸く江北一圓を含むまでに發達したものと見える。

之と五臧山經の南の限界とを比較するに、後者が五嶺以北に及んでゐるのは、穆王以後に洛陽を中心とする政治的勢力と共に文化が南方に波及した結果と想はれ、後者は穆王の時代よりは餘程後に出來たものと考へるのが當然であるらしい。

五、東亞地域の地文的及び人文的概観

我々の歴史地理上の研究に従へば此の如く東亞の土地全體は有史の時代を通じて一の單位地域を成し、その局部にはそれ／＼異つた民族が割據して住居したとはいへ、中央の勢力の盛なる時期にはその中心と邊裔との間に求心的及び遠心的の交通が行はれて文化傳播の途が開けてゐた。従つて我々の考察すべき地域は中央亞細亞即ち純然たる大陸性の地域とその邊縁地帯と海洋の影響の優越する半島及び島嶼地帯との三つの地文的に互に頗る異つた性質を有するものを包含する。

此の三地帯の地文的對照の民族の生活狀態に影響する所の頗る多かるべきは容易に看取され、東

亞文化に對して時代によりその箇々の因子が特に力強く働いてゐるものと考へねばならぬことなるのである。

地文上から言へば此の三地帶の對照は地盤を構成する岩層の性質とその受けた變動に既に頗る認めらるゝも、その最も顯著なるは近い地質時代から現今に至るまで絶えず働きつゝある所の營力の相異である。海洋の影響の最大なる島嶼半島とその中庸なる邊緣と最小なる内陸との間に地理的風景が大に異なる事實がそれであつて、民族の生活狀態も亦た之と相伴ひ人文上の著しい對照が出來てゐる。

地盤を構成する岩層を觀るに大陸に古いものが堆積發達し、その邊緣の海面に堆積した新らしい岩層が次第に之に後れて陸面となつた傾向が認められるが、之と類似の趨勢が文化民族の成立に就いてもあるらしく、支那民族の祖先とその郷土に就いて我々の研究した所では、夏殷周の三民族共に中央亞細亞に起源するらしく、その邊緣地帶に移動して支那文化の成立を見た結論し得る。此の關係は恰も岩層の堆積を起す地質學的營力が古生代の初期まで全く南支那の大部分、朝鮮南部及び日本群島に痕跡を認め難いのと趣を同じくし、東亞の人類活動の舞臺は先づ中央亞細亞の泉地に開かれ、希臘人祖先の神々がオリムポス山を舞臺とする如く、昆侖が東亞民族の古い神話の舞臺となつて、海内經の黃帝后羿等に關する種々の面白い傳説は何れも此處を中心としてゐる。是は東亞の人文地理學的考察に當り頗る面白い事實として擧げねばならぬ。